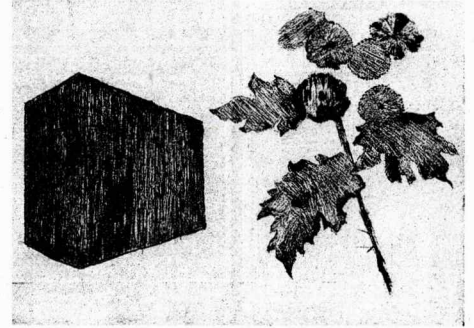


歌壇 俳壇



岩尾恵都子 菊とマンション

長谷川 權選

福島の遠き未来の春を待つ (福島県伊達市) 佐藤 茂
ラグビーや青春は青春を語らず (川越市) 渡邊 隆
浮かび来てより陸まじき二羽の鴨 (東かがわ市) 桑島 正樹
凍晴や白き無言の浅間山 (深谷市) 時田 清
読初の張飛遁走するところ (朝倉市) 深町 明
食べながら眠り給へる寒見舞 (下田市) 森本 幸平
冬夕焼からせまり来る電車かな (川崎市) かとうゆうき
嘴に傷ある鷹の名はカムイ (栃木県壬生町) あらむひとし
ラグビーの一方的な強さかな (静岡市) 松村 史基
プーチンの正義は知らず鬼は外 (いわき市) 開発 廣和

【評】一席。遠き未来を待つしかない？ 福島、沖縄を詠みつづける人。二席。青春の渦中の人、青春を語りえず、体で発散するのみ。三席。新しく生まれ変わったように。人もこうありたい。十句目。だれにでも正義がある。何とでも言える。

大串 章選

書に倦みて枯野のこゑを聞きにゆく (柏市) 物江 里人
しとやかに墓場へ曲る雪女郎 (町田市) 岩見 陸一
山眠りゐても山彦返しけり (東京都江東区) 小出 功
冬薔薇傷つきながら咲きにけり (今治市) 横田青天子
黙々と冬野を駆くる若人よ (横浜市) 田中 靖三
龍太にき谷の深さや雪の村 (高松市) 島田 章平
死神を寄せつけぬやち布団干す (八代市) 山下しげ人
炭焼きで生涯映を離れざる (岡崎市) 澤 博史
宿場路つ木曾路はすべて雪の中 (長野市) 宮沢 信博
何もかも住職ひとり落葉掃く (横須賀市) 阿部 文彦

【評】第1句。人智が記した「書」の声はしばらく置いておき、あるがままの自然の声を聞きにゆく。第2句。成程、そうか。あの「雪女郎」はあの「墓場」から来ていたのだ。第3句。「眠りゐても・返しけり」が言い得て妙。俳諧味あり。

高山れおな選

咳の大聖堂に吸ひ込まれ (吹田市) 小井川和子
落つるは母凍つるは父と思ふ滝 (長野市) 縣 展子
鬼の首取つて逃けたるラガーかな (伊勢原市) 合志伊和雄
湯たんぽにすべてをゆたね夢を見る (新宮市) 中西 洋
立ちさうな卵と遊び春を待つ (尼崎市) 田中 節夫
えんぴつはたたかうきのみかただよ (新潟県弥彦村) 熊木 和仁
凄まじや凍湖に水漬く冷蔵庫 (取手市) うらのなつめ
おじさんとうしろにドスン大こ引へ (東京都練馬区) 小池 来翔
薔薇の枝切り払ひし夜冬の雨 (裾野市) 内木場拓史
ふゆのつきまじかなやまをまどかにす (宮城県美里町) 狩野 宏史

【評】小井川さん。個人的な思い出では、中仏のプールジュ大聖堂が人っ子一人いなくてこんな感じだった。縣さん。大胆な断言に説得力あり。合志さん。この場合の鬼の首はもちろんラグビーボール。見事な走りやテンヤワンヤが目に見えなかつた。

小林貴子選

周防灘潮風飛沫鳴の陣 (厚木市) 辛嶋 正義
ネパールの男の子薄着や麻上げす (戸田市) 蜂巣 厚子
冬の葬まるで子どもときの顔 (秩父市) 浅賀信太郎
スパートを仕掛ける坂を息白く (西海市) 前田 一草
ラグビーの一方的な強さかな (静岡市) 松村 史基
無理遣りに温いと思う日向ぼし (横浜市) 西山 順泰
おそろくは車のかたち雪深し (青森市) 小山内豊彦
銀行の入ってすぐのポインセチア (東京都新宿区) 各務 雅憲
闇汁の闇を作るもむつかし (大阪市) 山内 蘭彦
プリンパン熊よけに歌う登山道 (相模原市) 榎本 ハナ

【評】一句目。瀬戸内の西端で、潮風のしぶきを浴びる鴨。ほぼ漢字で書かれ、力強い。二句目。「薄着」への着目により、子どもの元気さが伝わる。三句目、幼い頃から知っている間柄の別れが切ない。四句目、長距離走では駆け引きも大事。

俳句時評 虚子の多面性

岸本 尚毅

虚子生誕一五〇年をしくめる昨年十二月、坪内稔典著『高浜虚子』(ミネルヴァ書房)が刊行された。この評伝は、正岡子規との関係、雑誌「ホトトギス」の経営、小説・写生文の執筆、文芸の編集者や俳句の選者としての活動など、虚子の多様な面に言及する。
代表句も簡潔に紹介する。たとえば、「日」の移ろいを捉えた「遠山に日の当りたる枯野かな」と「桐一葉日当りながら落ちにけり」は「時間的俳句」。流れる大根の葉の早さかなは「二つの『日』によって流動感を生じる」。『虚子一代の傑作』だとする「爛々と星見え園生え」は「見え」「生え」という二つの動詞の連用形が勢いを伝える。
「昼寝する我と逆さに「蠅叩」を「我と蠅叩を同格にしている」、世評高い「去年今年貴く棒の如きもの」を「駄作中の駄作であること」で傑作になっている」とした評も興味深い。
端的に述べた句評は一句に数行。紙幅の大半は、俳句ではなく、小説、編集、経営などの虚子の多様な面に費やされている。こうした虚子の全体像と個々の俳句との関係をどう考えるか。これを十七音に取まらない虚子の大きさと見るか。あるいは、散文の作品も含めた虚子の豊かさが一句に凝縮されていると見るか。
虚子は「選者の仕事に営々と打ち込んだ稀な俳人、いや選者だった」と本書はいう。本書の描き出す人間虚子の幅の広さが、少なうとも選者としての度量には直結していたと考えるとよいのではなからうか。(俳人)

第15回北斗賞 文学の森主催。神奈川県藤沢市の古田秀さん(34)の「ファインダー」(150句)に決まった。若い俳人の輩出を目的にした賞で、40歳までが対象。
中村和弘句集「荊棘」「陸」主宰の第4句集。「人間の影こそ荊棘夜の秋」「張子の岩は燦銀なり初芝居」「深海魚潜に崩れ春暑し」(ふらんす堂・3300円)

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます(週に2作品まで)。QRコードから。